

にとつては、やはり聞き捨てならぬ御託宣に違ひない。他人事ではないのだから。

『あら、ほんとかしら？ ほんとだとすると私も彼氏に水兵をやめて貰はなけりやならないわ』

## 一 犬虚に吠えて

此の噂が女から女へ、それから女の彼氏達へと傳はり、たちまちのうちにリバウの軍港中へ蔓延して行つた。その眞疑を確めやうとしてジブシー婆さんを訪れる者がひきも切らず、中には相當上位の將校夫人の顔までも見受けられた。

元來ロシア人は迷信深い民族である。共産革命以前のロシアでは、宗教家の勢力は絶對的なものであり、ラスブーチンのやうな妖僧が、その催眠術的妖術の力を借りて、宰相大臣の任免にまでもあづかつた程である。いはんや愚昧なる民衆に於いておやだ。

一方、東洋に於ける日露の戦況はどうであつたかといふと、皇帝の命令によつて旅順港へ集結する爲に、根據地ウラヂヴオストツク軍港を出發南下した太平洋艦隊は、八月十六日に上村艦隊によつて朝鮮海峡に迎へられ、完全に近いまでに撃滅されてしまひ、東郷艦隊によつて封鎖され

てゐる旅順港の艦隊は今や袋の鼠となつてゐた。

そこで皇帝はヨーロッパにある全艦隊を東洋に送つて、その救援に赴かせる命令を發しなければならなかつた。それがロヂエストウエスキーの太平洋第二艦隊である。此の企劃が公されると同時に、リバウ軍港には一大センセーションが捲き起つた。

『おい、とう／＼行く事にきまつたなア』

『東洋くんだりまで死に行くなんて意味ないぞ』

『全くだ。東洋まで無事に行かれりやいゝが、此の頃の噂ではバルチック海を外に出た邊でやられさうぢやないか』

『さういへばあのジブシーの占者の話だどうやら北海の邊まで日本の水雷艇でもやつて來てゐて、俺達が出て行くのを待伏せしてゐるらしいな』

『どうもさうらしい。こんな事なら水兵なんかになるんぢやなかつた』

甲板の隅などでヒソ／＼とこんな噂話を交はし乍ら、ためいきを漏らしてゐる水兵がゐるかと思ふと、

『ねえあんた、お願ひだからもう艦を下りてよ。いくら澤山お金を貰つても、死んぢまつちやつ



まんないわ』

『そんな事をいつても、俺はまだ期限が切れてはゐない。皇帝の命令とあれば仕方がないぢやな  
ゝか』

『だからさ、私と一緒に何處か見つかからない所へ逃げやうぢやないの。一年や半年は私が稼いで  
喰べさせて上げるわ。さうしてゐるうちに戦争も終るだらうからさ』

酒場の一隅でかき口説く女もある。

その頃から水兵の脱走者が續々と出はじめた。脱走者を重刑に處する旨の告示が發表されても  
そんなものはあまり利き目がなかつた。十月十日頃出港の豫定が發表になると、九月の末頃には  
二百人も三百人も水兵が、團體になつて脱走を企てるのがあつたり、戦争を呪つて暴動を起し  
たりする者迄も出て來た。その度に軍部ではコザツク兵の出動を命じ、暴徒を獸の如く虐殺した  
りして脱走を防止しやうとした。然し、さうした對策もあまり効果はなかつた。

脱走兵を補充する爲に、他の商船などから豫備兵の強制徴集を行はなければならなかつたが、  
その事あるのを未然に知つた船乗り達は、續々と船を捨て、田舎に姿をかくしてしまふ。遂に出  
港豫定日の十月十日が來ても、艦隊は乗員不足で出帆する事が出来なかつた。萬策盡きた政府で

は窮餘の一策として海軍監獄に收容されてゐる囚人を鎖附のまゝ軍艦に護送し、やうやく豫定よ  
りも五日を経過した十月十五日、どうにかリパウを出港する事ができたのだつた。

次第に視界から消え去つて行く故國を見やり乍ら、彼等哀れな水兵達は悄然として深いためい  
きを吐いた。若い士官は私に艦内の禮拜堂に行つて、絶望的な祈りを献げた。

『神よ。我々は決して再び故國を見る事はないでせう。我々は最もひどい且つ最も無益な犠牲に  
捧げられてゐるのです。嗚呼、願はくば一刻も早く日本軍にめぐり遭ひ、我々を粉碎し盡さんこ  
とを!!』

士官達は夜に入ると、艦内の酒場に集つてシャンパンを抜き自棄くそになつて出港を祝つた。  
水兵達は酒保のウオトカを無闇矢鱈とあほつて、陰鬱な豫感を忘れやうと亂痴氣騒ぎに耽つてゐ  
た。

そんな絶望をのせた大艦隊が、戦々兢兢々として北海にさしかゝつたのだからたまらない。イギ  
リスのトロール漁船隊を、待伏せしてゐた日本の水雷艇隊と誤認したのも當り前の事ではない  
か。



## 波蘭獨立運動の志士

その事があつてから間もなく、リバウ軍港のジブシー婆さんの姿は、煙の如く軍港町から消え失せてしまつた。然し、それが他ならぬ流浪の民ジブシーの事だから、誰も別に怪しんでみる者もなかつたのである。

それから幾日か過ぎた或る日の事、ドイツの首都ベルリンの某ホテルの一室で、一人の日本人と一人の若い外人と、それから六十近い老婦人とが會見してゐた。

「有難う。僕はこんな効果を奏しやうとは夢にも思つてゐませんでした。日本全國民に代つて厚くお禮を申します」

日本の紳士は嬉しさに莞爾として、相手の二人の手を固く握りしめるのである。

「いや、さう仰しやられると返つて恐縮です。僕はツアーの虐政に泣く我々亡國のポーランド民族に代つて、日本の御好意に酬みただけの事なのです。ねえ、お母さん」

若い外人は淡い昂奮を面に浮べて、傍の老婦人を顧る。

「ええ、さうですとも。私の一寸したいづらがお役に立てば結構です」

老婦人も嬉しさにニツコリした。日本の紳士は内ポケットから分厚な紙包を取出して、老婦人の前に差し出した。

「時に、これはほんの寸志にしか過ぎませんが、どうか我々の志としてお受け下さるんですか」

「いゝえ、とんでもない。私はそんなつもりで此のお役をお引受けしたわけではないのですから……」

老婦人があわて、辭退すると、

「さうですとも。我々同志の爲に一方ならぬ御援助を賜はつてゐるお禮心なのですから、どうかそんな事はなさらんで下さい」

と若い外人も紙包をつき戻さうとする。

「さうですか。では改めてこれをあなた方ポーランド獨立運動の爲に、喜捨として献げたいと思ひますが、それならば受取つて下さるでせうな？」



日本の紳士の言葉を聞くと、若い外人の頬にサツと感激の紅潮がさした。

『有難う。喜んで頂戴します！』

彼はいきなり日本の紳士の右手を力いっぱい握りしめた。その両眼には涙さへも浮んでゐる。老婦人の頬もぬれてゐた。

さて、此の老婦人が誰であるかは讀者諸君も既に想像がつかれた事と思ふ。改めて紹介する迄もなく、リバウ軍港から姿を消したジブシーの老豫言者である。では、その息子と見られる若い外人は……？ それからもう一人の日本の紳士は……？

明治三十七八年、日露戦争の行はれてゐる最中、ベルリンの駐獨日本大使館を中心として、故明石元次郎中將（當時は大佐）が主班となつて、裏面からのロシア牽制に頭腦を絞つて暗躍してゐた事は、今では相當知られてゐる筈である。皇帝の暴政に不満を抱く革命分子を煽動したり、フィンランド獨立運動の志士、ポーランド獨立運動の志士などを刺戟して、私かにその運動の援助を行つたりして、何時内亂が勃發するかもしれないやうな氣運の醸成に努め、ロシアをして全兵力を極東に傾ける事が出来ないうやうにしむけてゐたのだつた。

十世紀の中葉に於いて、ピラスト王朝によつて建國されたポーランドは、以後一千年近い歲月

の間、波瀾重疊の興亡史をくり返し、一八一四年以來ポーランド王國は名のみの存在と化し、ロシア皇帝の横暴な統治下に泣かされてゐたのである。元來血の氣の多いポーランド人は、その間幾度か執拗な獨立運動に蹶起した事もあつたが、常に時利あらずして鎮壓され、再起の日を待ち待つてゐた。彼等にとつて極東に開かれた日露の戦争は正に捲土重來の機會に違ひない。

何時爆發するかもしれない休火山をふところにしたロシアが滿洲に大敗を喫し、日本海に撃滅の悲運をみた事は、無論皇軍の偉大な力による事はいふまでもないが、裏面暗躍の功績も忘れてはいけない。

明治三十七年十月十五日にリバウの軍港を出發してから、はるく三萬四千キロの波濤を越え半歳餘りの歲月を費して、やうやく翌三十八年五月二十七日東洋の戦場に到着はしたものの、僅か一日のうちにバルチック艦隊は全滅してしまつた。ジブシー豫言者のいたづらな豫言は、あまりにも美事に的中してしまつたのである。それは我等の海軍の父東郷元帥の偉大なる功績には違ひないが、彼等は故國出港の際、既にかくなる咒はれた運命を負つてゐたのである。その運命を醸成した日露の偉勳者を、我等は時に想起しやうではないか。



不用意な青年達



## 思はぬ不當利得

「あ、もしく、一寸お願ひがあるんですが」

ふと背後から呼びかけられて、いゝ機嫌でカフェーを出て来たシュミットとハイエルマンとは何気なく振返つた。何處かで見た事のある顔だが、未知の若い男が馴れ馴れしく歩み寄つて来る。

「何ですか？ 御用といふのは」

シュミットが怪訝さうに反問する。

「いや、實はさつきからお手並を拜見してゐたんですが、お二人とも大したもんですな」

男はニヤリと變な笑ひを浮べる。

「なアに、今夜は運がよかつたのさ。で、用といふのは何ですな？」

ハイエルマンが薄氣味悪るさうに追及すると、

「その邊まで御一緒に歩き乍らお話しませうよ」

といひ乍ら、男は二人と肩を並べて歩き出すのである。

「お願ひといふのは他でもないんですが、實はあなた方のお腕前を拜借したいんですよ」

「腕前といふと……？」

「今のお腕前でさア。カルタの事ですアね。といふのは……」

と前置きをして語り出した話はかうである。その男の名はフリッツ・デーメルといつて、オランダの船會社に暫く勤めてゐたが、去年から少し身體をこわして遊んでゐるのだといふ。やはりオランダのオスタンド港の金持で、ホフマンといふ老人が此のカールスルーエの郊外に別荘を新築して、時々静養に来てゐるのだが、此の老人が大變なカルタ好き、しかも腕は頗るへボなんだが、所謂下手の横好きといふ奴で、明けても暮れてもカルタを遊んでゐたいのだ。金はあるし、暇はあるし、勝つても負けてもそんな事はどうでもいゝので、たゞ無闇と相手を欲しがつてゐる。で、此のデーメルが友達と二人で相手をしてゐたのだが、その友達が急に用事ができて、昨日オランダに歸つてしまつた爲、爺さんは相手がなくなつて困つてゐる。その相手になつてくれまいかといふ頼みなのである。



「實際勿體ないやうなカモでしてね。私一人で相手をしていゝんですが、いくら先がへボでも運のつかない時にはダメなもんでさア。で、昨夜はしたゝかやられてしまつたんですよ。今夜は是非とも敵討がしたいんですが、どうも私一人ぢや心細いんです。といふのが、今迄は芽が出なくなるゝと友達と二人でしめし合せて、コツソリとインチキをやつたりしてゐたので、絶対に間違ひがなかつたんですが、一人ぢやどうにもなりませんや。何しろ少しボケてゐる爺さんですから、一寸位インチキをやつてもわかりやしないんです。どうでせうねえ、相手をしてやつてくれないでせうか？」

悪くない話である。もどく嫌ひではない道だし、家に女房が待つてゐるといふわけでもなし、のんきな獨身者のシユミットとハイエルマンとは、大いに心が動いて來た。それにのしかゝるやうに、

「なアに、資本の方は御心配なく。一晩位負けつて、三百や五百はまだありますから。うまく行けば一晩に三人で千マーク位は稼げるんですから、悪くないぢやないですか。おまけに酒は上等のライン葡萄酒が飲み放題だし、あなた方の腕前なら間違ひありませんよ。どうでせうなア？」と棚から牡丹餅のやうなうまい話に、二人ともすつかりその氣になつてしまつた。それでは早

速といふ事になつて、道々デーマルにインチキの手を色々と授けられ乍ら、ホフマン爺さんの別荘に押かけて行つた。

もう夜も遅かつたので、はつきりとは判らなかつたが、別荘はラインの溪谷を遙かに見渡す景勝の地に、なか／＼瀟洒たる建物である。そこにホフマン老人は四十がらみの家政婦と、若い美人の女中と三人きりで住んでゐるのである。

「これは／＼、よう来てくれなかつた。では早速はじめますかな」

デーマルが二人を舊友と稱して紹介すると、老人は如何にも待ち兼ねてゐたといふ風をして、上品な三角形の顎鬚を撫で乍ら、二階の客室に案内して行く。

早速合戦が始まつた。カード・テーブルの傍にちやんと小卓が置いてあつて、その上にはライン葡萄酒は勿論、スコツチ・ウキスキーもあれば、チェリーブランデーもあるといつた豪華版。その上夜が更けて來ると、美人の女中がカヴィアのサンドウキツチを造つて持つて來てくれるといふ有様だ。

合戦の方も無論悪いわけではない。翌朝東が白みかける頃には、二人ともそれ／＼四五百マークの不當利得をふところにして、意氣揚々と此の別世界を引上げたのだつた。



## 新 來 の 客

さて、此の果報者シユミットとハイエルマンに就いて一應説明して置かう。

彼等の住むカールスルーエの町は、ドイツの西南方フランス國境に近く、今では有名なジューグフリード要塞線が、南のスキス國境から始まつて北上し、此の町の郊外で西折してザール地方に走つてゐるが、この話の起つた一九三六年頃には、丁度その要塞築造工事の眞最中だつた。

二人とも中等工業學校出身者で、シユミットは水道敷設工事の製圖技手、ハイエルマンはコンクリート工事の製圖技手として、要塞築造作業所に働いてゐる。それ／＼故郷は別だつたが、同じ下宿に泊り合せて、同じ要塞工事に働いてゐる關係上、いつとはなしに親交を絶ぶやうになつたのだつた。

その翌日も作業を終つて、いつものカフェーに行つてみると、前夜のデーメルと名のつた男が待つてゐた。

「ホフマン老人がお待兼ねですよ。今日こそ敵討ちをするんだといつてね。なアに、返り討ちになるにきまつてるくせに。さア、すぐに出かけませう」

と誘はれて、二人は渡りに舟とばかり出かけて行く。その夜も彼等は二三百マークづゝの不當利得にありついた。三日目も四日目もそんな風で、彼等はたちまち千マーク餘りの思はぬ金をふところにしてしまつたのである。ところが、それから五六日経つた或る晩、もうデーメルの誘ひなしに老人の別荘に押しかけて行くと、例の美人の女中が玄關に二人を迎へて、

「あら、いらつしやい。今日はデーメルさんが來られないんですつて。何でもオランダから電報が來て、急に歸らなければならなくなつたとかで、さつき御挨拶に來ましたのよ。あなた方によろしくつて事でしたわ。デーメルさんがゐないでも構はないぢやありませんか。主人もお待兼ねですし、今日は他にもう一人、デーメルさんの代りのお客様もありますから、ゆつくり遊んでゐらつしやいな」

といふ。その聲を聞きつけて、ホフマン老人も奥から姿を見せた。

「さア、構はんからズツと入つてくれんか。今日こそは敵討ちをせにやならんぞ」  
老人にすゝめられて二階に上ると、五十近いガツシリとした體格の紳士が、カード・テーブル



の傍に腰かけてゐた。

『これは僕の悪友でな。ザイラー君ぢや』

と老人に紹介されて、二人は握手の手をさし出したが、何となく鋭い瞳に射すくめられて、不気味な思ひをするのだつた。いよく合戦となると、そのザイラー氏が、

『なア老人、君はインチキが上手だつたが、今夜はもう絶対にやらせんぞ』  
とニヤ／＼笑ひ乍らいふ。

『何をいふとる。君こそインチキの大家ぢやろが。ワツハツハ……』

と老人も笑ふ。二人は脛に傷を持つだけに、此の會話がピンと應へた。二人の間に眼だけで

『今夜はあの手をやるまいな』といふ意志表示が交換された事は勿論である。

と、その晩はどうした事か、老人と新來のザイラー氏とに芽が出て、二人は惨敗に惨敗を重ねてしまつた。折角四五日がりて稼ぎ貯めた千マーク餘の不當利得が、百マークあるかなしになつて退散に及ぶ。そのまゝあきらめてしまへばいゝのだが、一度うまい汁を吸つただけにあきらめられないのが人情だ。その翌晩、二人は新手のインチキを考案して又出かけて行くと、相變らずザイラー氏も待つてゐて、いさ新手を用ひやうとすると、彼の鋭い瞳がギラリと光る。折角の

新手も遂に用ひる機會が掴めず、又しても二人は惨敗の憂き目をみなければならなかつた。さアさうなると事である。昨日はどうか敗けを支拂ふ事ができたが、今日はもう二人の持金を合せて二百マークあるか無しだ。しかも二人の敗け高を合計すると千三百マークばかりになるのだ。

『さア、やつとの事で敵討ちができたぞ。折角敵を討つても、どうせ又明日あたりは諸君にとられてしまふんぢやらうが、兎に角今夜の分を拂つて貰ひますかな』

老人は如何にも嬉しさうにニコ／＼して、早速紙の上に計算をやりはじめた。  
『實はその、今夜は用意がないんですが、明日お拂ひしちやいけないでせうか？』  
シユミットが恐る／＼申入れると、

『どうですな、老人。君も今迄敗けの支拂ひを翌日に延した事があるんですか？』  
とザイラー氏が變な質問を老人に挟む。

『いゝや／＼、僕はいつもその場で拂ふとつたさ』  
老人の返辭を聞くと、

『さうだらうなア』  
とザイラー氏は大きくうなづいてから、二人をキツと睨み据えた。



「君等は賭け事の支拂ひは總てその場勘定といふ不文律を知らんのかね？ いや、一度でも老人が翌日拂ひをした事があるのなら別ぢやが、さうでなかつたら今直ぐに拂ひ給へ」

「然し、生憎く今夜は用意して來なかつたもんですから……」

「そんな不徳義は許されん。勝つた時はチャン／＼と受取つて置き乍ら、敗けた勘定を待つてくれなんて、そんな事があるもんか。第一、用意して來なかつたとは何事だ。老人に訊くが、此の二人とは長の交際ですか？」

「いや、ほんの一週間程前に紹介されたばかりでな」

「そんなら猶更の事だ。拂ひ給へ」

ザイラー氏は威丈高になつてきめつける。

「然し、今夜は……」

二人はすっかり參つてしまつた。するとザイラー氏が、

「よろしい。僕は飛び入りで昨日今日と勝ち續けたのだから、君等に代つて老人の勝つた分は僕が拂つて置く」

といつて、老人の計算書を見乍ら紙幣を數へて差出した。そして辟易してゐる二人に、

「いゝかね、二人の敗け分千三百八十マーク、僕が立替へて置くから、明日は必ず合戦の前に拂ひ給へ」

「はア、承知しました」

「では、念の爲に此の手形にサインをして置き給へ」

二人は手形用紙をつきつけられて二度びつくりした。あまり苦勞をした事のない彼等は、手形がどういふ効果を持つものか、あまり詳しい事は知らなかつたが、兎も角も此の場合、いはれるまゝに署名するより他はなかつた。

### 危険な誘惑

翌日の晝休みに二人は場所をきめて落會つて、善後策を講じる事になつた。然し一ヶ月働いても百五六十マークしか貰へない彼等に、たつた一日の間に千マーク餘りの金の都合が出来るわけではない。その結果がどうなるかわからないが、此のまゝ猫婆をきめるよりも、いさぎよく今夜も一度出かけて行つて謝る事にしやうと相談して、作業が終ると二人はつれ立つて作業所を出て



行った。

すると、前方から二日間姿を見せなかつたデーマルが、急ぎ足に二人の方にやつて来た。

『君達は昨夜えらい事になつたんだつてね』

彼は苦笑し乍ら問ひかける。

『さうなんだ。それで困つてゐるんだけど、どうしたらいいだらう？』

『僕が居ないと聞いたら、やらずに歸ればよかつたのになア。何しろあのザイラー氏は検事上りの辯護士で、人は悪くはないのだが、とても規帳面な男なんだよ。で、君等が金を用意しないで合戦に加はつた事を、不徳義極まるといつてカン／＼に怒つてゐるんだ』

『さうらしい。若し君のところまで都合がいたら、一時貸して貰へまいか？ 今夜又やつて勝つた上で返すから』

『それがね、旅に出る前だと千三百マーク位はあつたんだが、僕は最近に結婚するので、婚約者にみんな金を渡して来てしまつたのだよ。今は二三百マークしかないんだ』

『どうだらう、ザイラーさんに謝つて、もう二三日猶豫して貰へまいか？』

『さア？ 何しろひどく憤慨してゐるし、君等は手形にサインをしたらしいね』

『うむ、さうしろといはれたもんだから』

『まづかつたなア。相手が辯護士だからね。しかも支拂ひ期日が今日になつてゐるぢやないか。あんな手形にサインする奴があるもんか。ザイラー氏はすぐに差押へてやるつていつてゐたよ』

『いつたい何を差押へるんだらう？ 僕等の持つてゐる物なんて、金になりさうな物は一つもありません』

『いや、無論品物でなく、君達の月給を差押へるのさ』

『えツ……？ すると要塞築造司令部へ出かけるつもりなのかしら？』

二人は愕然として顔を見合はせた。彼等がそんな賭博に耽つてゐる事が司令部に發覺したら、その日から鹹になるにきまつてゐる。

『無論さうするつもりだらうねえ』

とデーマルが肯定するのを聞くと、彼等は眞つ蒼になつてしまつた。すると、デーマルはふと何か思ひ出したやうに、

『あ、さうだ。いゝ事がある。君等ならできない事はない筈だからなア』  
といつてヂツと二人の顔を見る。



「何だ？ 何かいゝ方法があつたら教へてくれ給へ」

「僕から頼んでホフマン老人から一時金を借りて上げやうか？」

「うむ、さうしてくれ給へ、頼むよ」

「だが、それにはたゞちやいけないぜ。あの老人、あれでなか／＼抜け目がないから、欲で釣つてやるんだよ」

「どうすればいゝんだね？」

「實は、僕が今度電報でオランダへ呼ばれたのはその事なんだが、オランダ政府でヒットラーの侵略主義を恐れて、オランダとドイツの國境に強大な要塞線を築造する計畫があるんだよ。僕が此處に来てゐるのを幸ひ、若し調べられたら此の邊の國境要塞の様子を調べてくれといふのだ。無論、政府筋の依頼ではない。工事請負業者からの依頼なのだが、参考までに知つて置きたいといふのさ。その請負業者のパトロンがあつたホフマン老人なんだから、その話をして君達に力を借りる事にすれば、千や二千の金は何時でも出してくれると思ふんだ。どうだらう？」

要塞工事の話になると、二人は當惑さうに顔を見合はせて、深いためいきを吐き合つた。作業所外に於ては絶対に要塞工事に關する話をしないと云ふ頗る嚴格な誓約の下に、彼等は今の仕事

にたづさはつてゐるのである。

「さア、それはねえ……」

シュミットは力のない聲でいつた。

「困つたなア。だが……」

ハイエルマンは不安さうに聲を震はせた。

「然し君、今の場合、それより他に方法はないと思ふがねえ。若し君等が引受けてくれるのなら、圖面一枚に對して一千マークづゝ支拂はせる約束をして上げられると思ふのだ。十枚で一萬マークだぜ。それだけあればたとへ鹹になつたとしても、樂に暮せるぢやないか。若しドイツにゐるのが危険だつたら、僕の故郷のオランダに来てもらふさ。ホフマン老人に口を聞いて貰へば、高給でその工事の監督官になる事もできるだらうし……」

それまでデーメルの話の話を聞くと、

「さうだ。それより他に方法がないよ。さういふ風に頼まうぢやないか、シュミット」  
とハイエルマンがのり出した。

「さうかなア。仕方がない」



シュミットも同意しないわけには行かなかつた。

## 美人女中の役目

シュミットとハイエルマンとをカフェーに待たせて置いて出て行つたデーメルは、一時間ばかりの後に内ポケットを膨らませて戻つて来た。

『大成功く！』 ホフマン老人大喜びさ。全部僕の申出を承諾させたよ。さ、これがその手金だ』

十マーク紙幣百枚を一束にしたのを、一束づゝ握らせられて、シュミットもハイエルマンもホツと息を吐いた。地獄で佛に逢つたやうな心地だつたが、その佛が實は悪魔であつた事を、彼等は気がつかかなかつたのである。

それから三人は伴れ立つてホフマン老人の別荘へ出かけて行つた。

『ザイラー氏は何も知らないんだから内密だよ。君達は威張つて借金を叩き返してやればいゝんだ』

デーメルが耳打ちされてゐるので、彼等はいゝ氣持さうに威張り返つて、ザイラー氏へ借金を拂つた。

『さ、これでいゝんでせう。これつぼつちの金は家に歸ればいつでもあるんです』

『いや、僕もさうは思つたが、然し勘定は勘定だからね。まア氣を悪くせんでくれ給へ』

ザイラー氏は如何にもテレくささうにして、手形を返すのである。彼はその夜は早く歸らなければならぬといつて、一三三回合戦をしただけで、一三三マーク敗けた分を置いて歸つて行つた。

後に残つたのはシュミットとハイエルマンとデーメルと、主人のホフマン老人の四人きりである。

『君達はその件を引受けてくれたさうだね。有難う』

と老人が改つて口を切つた。

『どう致しまして。僕等こそ』

『時に君等はどうして圖面を寫すつもりぢやね』

『いや、まだそれ迄は考へてゐません』



「それがかんじんな事ぢやよ。寫し取る事が出来る自信があるかね？」

「さア、これから大いに研究しなければならぬと思つてゐます」

「それぢや困るね。デーメル君、君の考へは？」

「さうですな。敏速に正確にといふ事が先決問題ですから、これはどうしても寫眞機で撮影するより他はないでせうな」

デーメルが答へた。

「成程。それには丁度いゝものがある」

といつてホフマン老人が呼鈴を押すと、美人の女中が入つて来た。

「僕の小型寫眞機を持つて来てくれんか」

老人に命令されて女中が去ると、

「然しなんぢやらうね、監視は随分嚴重ぢやらうが、その監視網をうまくぐりぬける自信があるかね？」

と又老人が質問する。

「それも問題なんです。かういふ仕事は、夜間人の少い時でなければいけないと思ふんですが、

夜間の守衛長といふのがとてもうるさい人で……」

ハイエルマンが額を曇らせた。

「さうだなア。グラス中尉にしても、エーニツケ中尉にしても……」

シユミットが不安さうにつぶやくのを聞いて、老人が、

「え……？ 何？ エーニツケ中尉……？ はてな、聞いたやうな名前ぢやが……。エーニツケ

中尉……。エーニツケ中尉……？」

と同じ名を繰返して思ひ出さうとしてゐるところへ、美人女中が頗る精巧な小型寫眞機を持つて入つて来た。彼女はふと老人の獨り言を聞き咎めて、

「あの旦那様、エーニツケ中尉がどうか致しまして？」

と問ひかける。と、老人はボンと膝を叩いた。

「あゝ、さうぢやつた。さうぢやつた。アンナに結婚を申込んだといふのがエーニツケ中尉といふたつつけのう」

「えゝ、さうですわ。それがどうか致しまして？」

「いや、これは好都合ぢや、兩君とも心配せんでもいゝ。そのエーニツケ中尉の當番の夜、時間



を打合せて出かける事にすればきつとうまく行く。アンナに一役買つて貰へばいゝんぢやよ』  
それから美人女中のアンナも一枚加はつて、五人が額を集めて密議に耽つた。さて、どんな相談が纏つたのだらう？

## 獨身の老中尉

獨佛國境線に沿つて、フランスの所謂「マチノ要塞線」に對抗すべき「ジグフリード要塞線」の築造工事が開始されたのは、ドイツがヴェルサイユ條約文を破棄してラインランドに駐兵を敢行し、人民投票によつてザール地方の復歸が決定された前後の事であるが、それは頗る嚴重な監視のうちに、極めて秘密裡に進行されたので、殆ど外部からは窺ひ知る事が出来なかつた程だつた。それだけにフランス側の間諜網の活躍は物凄じばかりで、どれ程の数の密偵が國境を越えて潜入した事か知れない。然し、彼等は嚴重なドイツ側の警戒に殆どなす術もなく、金城鐵壁を誇る「マチノ線」の不安が次第に増大して行つた。

ドイツ側では蟻の這ひ入る隙もない程嚴重な歩哨線を敷き、各作業管區の衛門の他は、殆ど人

の出入りを禁止して、夜間は各所に探照燈を設置し、衛門には中尉級の士官が部下と共に頑張るといふ有様だつた。殊に守衛士官には若い者よりも、老巧な者といふ綿密な注意から、下士官上りの眼の利く人物が物色された。

エーニツケ中尉がその一人である。彼は第一次の歐洲戦争に一兵卒として出征し、戰場を馳驅した經驗のある古武者で、粒々辛苦の結果四十歳近くなつて中尉の位をかち得たのである。だが、軍部の當事者は彼に大變な見落しをしてゐた。といふのは、二三年前、彼は愛妻に先立たれてしまつて、今では頑健な體内にはち切れるやうな精力を、どう消化してよいのかに迷つてゐる獨身者だつたのだ。

或る晩の事である。夕食に飲んだビールの淡い酔ひ心地を味ひ乍ら、彼が夜間守衛長の勤務に就くべく、宵闇の町を衛門の方に歩いて行くと、突然、一人の若い女が歩み寄つて訊ねた。

『一寸お訊ねしますが、あなたの隊にゴットワルドといふ少尉さんがゐないでせうか？』

『ゴットワルド……？』 さてな、聞いた事がないですね』

と答へて何氣なく顔を見ると、肉附のいゝすばらしい美人だ。

『まあ、どうしませう？ 私困つたわ』



彼女は如何にも當惑したやうにためいきを吐く。

「少尉以上の士官なら、此の邊に勤務してゐる者は大概知つてゐる筈だが、ゴットワルドといふのは聞かんですね。此のカールスルーエにゐるといふのですか？」

中尉が反問すると、

「それとはつきりしなりのですけれど、人の噂にカールスルーエの要塞工事に行つてゐると聞いて、早速捜しに来てみたんですの」

「成程、で、あなたはゴットワルド少尉にどういふ用事があるのです？」

「どういふ用事つて……。私、その少尉と婚約をしたんですけれど、此の二年ばかりどうした事か、ちつとも便りをくれませんの。何處へ聞き合せてもわからないんです。私は親も兄弟も何もない一人ですから、他に誰も便る人がなく、ゴットワルド少尉と結婚するのを唯一の望みに生きてゐますのに、こんなめに逢はされるなんて……」

女はとう／＼シク／＼と泣き出した。

「いや、それはお氣の毒だ。然しなんですな。そんな人情のない男はあきらめるんですな。たとへ行方がわかつたところで便りにはならんですぞ」

「まあ、私、どうしませう？」

「なアに、世間は廣いです。あなたのやうな若い美しい人は決して困りはせんですよ。あッ、いけない。僕はもう時間がない。然し、此のまゝお別れするのは残念ですな。まあ心配せんで氣を大きく持つてゐ給へ。僕がきつと好い相談相手になつて上げる。今はもう時間がないから、さうだ、それすぐそこにフアーターランドといふ看板の出たホテルがある。あそこに泊つてゐ給へ。明日の朝、僕の方から訪ねて行つて上げる。ぢや、きつとですぞ。待つてゝくれ給へ」

さういひ残して中尉は走るやうに衛兵所の方に去つて行つた。その夜の勤務を終つて、果して女が待つてゐるかどうかと思ひ乍らも、彼はフアーターランド・ホテルに訪ねて行つてみた。すると前の晩の女が、昨日よりも美しく化粧をして彼の訪問を待ち受けてゐたのである。

それ以來、彼の氣持は急轉直下、彼女への思慕に燃え立つてしまつた。一度目か四度目に會つた時、彼はもう結婚の申込みをしまつたのだ。

「有難う。さういつて下さるのは本當に嬉しいんですけれど、私は一度さういふ求婚を眞に受けて、拭ふ事のできない傷を心に受けた女でしよ。だから今度は餘程慎重でなければいけないと思



ひますの。暫くお交際をしてみた上で返辭をさせて戴きますわ。その間、私は此の町で何か仕事をみつめて、自活の道を立ててゐますわ。ね、さうさせて頂戴」  
女の返辭はかうだつた。實に無理からぬ事である。中尉はいら立つ心の駒をひきしめて、彼女の決意の日を待たなければならなかつた。  
女はそれから間もなく、カールスルーエの郊外の別荘に、女中として住み込んだのだつた。いふまでもなく、その女こそ Hoffman 老人の別荘の美人女中 Anna である。

## 妖魔の如く

(此の頃忙しくて、どうしても晝間ぬけ出す事ができません。かうして幾日もあなたにお会いしないでゐると、淋しくてたまらなくなるのです。今夜十二時過ぎにあなたの御勤務先へお訪ねします。御迷惑でせうけれど、さうしずにはゐられない私の心持もお察し下さい。出来る事ならば、その時、あなた以外の方が衛兵所にゐないやうにして置いて下されば幸です) エーニツケ中尉はこんな手紙を Anna から受取つた。彼はその日一日、どんなに日が暮れるのを待ち遠うしく思つた事だらう。

その同じ日の夕方、いつもよりも仕事が多山あつたのか、製圖技手のシュミットが定刻より一時間も過ぎてゐるのに、まだ圖盤にかがりついてゐた。

「おや……? シュミット君、まだ歸らないのか? どうしたんだ?」

その夜の製圖室當直に當つた伍長が、見廻りに來て怪訝さうに問ひかけた。

「やア伍長さん、内密にして下さい。大變な失策をしちやつたんです。大事な圖面を引き違へちやつて、その訂正をやつてるんです。こんな事が部長に知れると大變ですからね」

「明日にしちやどうなんだね?」

「ところが明日の朝検査があるんですよ。まアかんべんしてくれ給へ。その代りかういふ物を上げますから」

彼はデスクの抽斗からリキュールの小壺を取り出した。

「何だ、酒ぢやないか」

「さうです。悪い事はできないもんで、さつき友達が呉れたんですが、コツソリ一口やつてみたりしたもんだから、こんな間違ひをしでかしたんですよ。こんな物を貰つたりするからいけない



んだ。飲んで下さい』

『さうか。ちや貰つとかう。早く歸り給へよ。』

さういひ残して伍長は去つて行く。伍長の姿が消えるとすぐ、シユミットは不安さうにし乍ら歸り仕度にとりかゝつた。

衛門を出て暫く行くと、相棒のハイエルマンが心配さうに待つてゐた。

『おい、どうした？ やつたかい？』

『うん、やつたよ。あいつ酒場を渡したトタンに舌なめずりをしてゐたから、きつと用ひるに相違ない』

『うまく用ひてくれりやいゝがなア』

二人は語り合ひ乍ら夕闇の中に消えて行つた。

時は過ぎて行く。夜は更け渡つて、そろそろ十二時近くなつた。

『おい、今夜は一寸わけがあるんだ。一時間ばかり此の衛門は俺一人で監視する。みんな暫く寝てゐてもいゝぞ』

いつになく、うるさ型のエーニツケ中尉が部下の衛兵達にそんな事をいひ出した。そこにはい

つも中尉の他に二人の衛兵が詰めてゐるのだ。

『ハッ？ 中尉殿お一人でいゝのでありますか？』

『いゝんだ。氣の利かん奴だなア』

『ハッ！』

二人の衛兵は眞面目くさつた顔を微苦笑で歪め乍ら、衛門から去つて行つた。

腕時計を見ると正に十二時。

『もう来る頃だが……？』

口の中でつぶやき乍ら、闇の彼方をヂツと見据えてゐると、突然、背後から誰か兩手で目かくしをした者がある。その手の柔かい感觸とむせるやうな體臭で、彼はすぐにアンナである事を知つた。

『こらく、びつくりさせるなよ。そんな事をしたつてわかつてるぞ。可愛い奴め。手を放さないか。おい、アンナ。よせつたら』

振り放せばわけなく離れてしまふアンナを、中尉はわざと放さうとはしないで、くねくねと身體をねぢらせ乍らあしらつてゐる。初戀のやうな戯れをひとときでも長く味つてゐたいらしい。



だが、その隙を狙つて、二つの黒い人影がスルリと衛門の關所破りをして内部に滑り込んだ事を、中尉は知る由もなかつたのである。

製圖室の守衛所では、當番の伍長がリキユールの酔ひにぐつすり夢路をたどつてゐた。そこへコツツリと二つの人影が忍び寄つたのも知らずに。だが、たゞのリキユールの酔ひにしては、あまりに眠りが深すぎる。胸の鎖を外されて、その中に懸けてゐる鍵の束を取上げられても、まだなか／＼眼を醒ましさうもない。

二つの人影はシュミットとハイエルマンとである。彼等は勝手知つたる製圖室に忍び込むと、鍵束の中から金庫の鍵を選び出し、その中に藏つてある圖面の束を取出して、青寫眞の暗室に持つて行つた。そこならば光線は絶対に外部に漏れつこない。シュミットが素早く圖面を壁の一方に貼ると、他の一方に構えてゐるハイエルマンが、 Hoffman 老人から借りて来た小型寫眞機で撮影する。此の四五日下宿に歸ると、毎晩二人で此の操作を練習して置いたので、順序がキチンとついてゐる。電光石火といひたい程の早業で、十何枚かの圖面の復寫ができてしまつた。

それが終ると圖面を元の金庫に藏ひ、再び製圖室を出て守衛室に忍び込み、鍵束を伍長の胸鎖の奥にかけると、妖魔のやうな素早さで外の闇の中にまぎれて行つた。

衛門の監視室では、まだ樂しげなランデヴーが続いてゐた。

## 憂國の目醒

それから間もなく、シュミットとハイエルマンとは前後して、過勞といふ事を名目に休暇を請願した。製圖室に働く技手にはよくある事なので、すぐにその請願は容れられ、彼等は二日ばかり日を隔て、カールスルーエから旅立つて行つた。事實、彼等はその頃急激に顔色が悪くなつて、憔悴が目に立つてゐたのである。

一足先にカールスルーエを出發したシュミットは、一先づケルン市に到着してハイエルマンが後から來るのを待ち受けた。ハイエルマンを乗せた列車がケルンの驛に到着するのを出迎へに行つたシュミットは、これが要塞工事の製圖工かと思ふやうな贅澤な衣類を纏つて、瀟洒たる青年紳士になつてゐた。それが薄給サラリーマンの理想だつたのであらう。思はぬ大金をふとところにすると、何よりも先づ夢に描いてゐた生活の眞似事がしたくなるものらしい。

ハイエルマンもその翌日には、まるで見違へるやうな青年紳士になりすませ、二人は堂々と一



等車に納り返つて國境を越え、懐れのパリ見物と洒落こんだのである。

彼等がそんな計畫を立てたのも、ホフマン老人やデーメルなどの差金だった。重要な仕事が入らなうと、彼等がカールスルーエにゐる事は返つて危険だったのだらう。

然し、如何に彼等が立派な服装をし、一等車に納り返つてゐたところで、やはり何處かいたに附かない所があつたらしい。その頃、獨佛の國境を越えて往復する列車の中には、必ず二人や三人の諜報關係の人物が乗り込んでゐた。敵地に潜入しやうとする者もあつたらうし、それを監視する防諜網の眼も鋭く光つてゐた。列車が國境驛に停車すると、旅券検査係の役人と税關吏とがどや／＼と車内に乗り込んで来て、旅券と旅具が検査される。彼等の眞新しいスーツケースの中には、縫目や裾や袖口などの毛がすつかり擦り切れて、ピカ／＼と脂光りのした外套だの、背廣服だのが入つてゐた。それは昨日まで彼等の身體に親しんで来た衣類だ。

『おやこいつは可怪しい？』

ふとそれを傍から覗き込んで、こんな第六感のさゝやきを聞いた人物がある。それはケルンから同じ列車に乗り込んで来たケルン警察署の刑事だった。彼は職掌柄、此のいたに附かない一等客を、初めて見た瞬間から注意してゐたのである。だが、もう國境を越えてしまつては、ドイツ

の警察官も警察官としての機能を働かせるわけには行かない。彼は幸ひと、パリの警察で捕縛された窃盗犯人が、ケルンで犯した罪をも白状したので、その檢證を依頼されてパリまで行く用向を持つてゐた爲、それとなく彼等の行動を監視する事にした。

そんな眼が自分達の上に光つてゐやうとは夢にも知らない彼等は、パリに到着すると分不相應な立派なホテルに泊り込み、朝から酒を呑んだりしてゐた。然し、いくら酒を飲んでもさつぱり浮いた氣分にはなれない彼等である。オランダは決してドイツの假想敵國ではないのだし、どう間違つてもオランダとの間にも戦争が起るわけではないのだから、要塞の圖面を賣つたところで、別に賣國行爲にはなりはしまいと、自分達のとつた行爲を自分の良心に辯解をしてみるものゝ、何か割り切れないものが残る。夜になるとモンマルトル邊に出没する女を漁つて、やたらに酒をあほつてもみるのだが、やはり心は浮き立つて來なかつた。

『お、あいつ達は本當にオランダ人かしら？』

ペロ／＼に酔つぱらつて、片腕を女の首に巻きつけ乍ら、突然そんな質問を相手にしかけたりする。

『あいつらが自分でさういふんだから、オランダ人にきまつてるさ。下らない事を考へるなよ』



ど否定しながらも、やはり相手もそれが氣になるらしい。  
と、或る日の事、彼等は路上で不思議な人物をチラツと見かけた。

「おや……？ ホフマンさんが行く」

最初に発見して聲を立てたのはハイエルマンだ。

「あツ、ホフマンさん？」

シユミツトの聲が大きかつたので、老紳士はふと振返つた。が、彼はさりげない様子で傍を通りかゝつたタクシーに手を上げると、スーツと歩道にすり寄つて来た車體の中に遁れるやうに乗り込んでしまつた。自動車はガソリンの煙を淡く残して、怪速力を出して彼等の視野から消え去つた。

「おい、今のは確かにホフマンさんだつたらう？」

「うむ、俺もさう思つたのだが……」

「氣のせいかしら？」

「殊によると心の迷ひかもしれないな」

「だがおい、ホフマンさんがフランス人だつたらどうする？」

「そ……そんなバカな事が……」

いつか彼等の良心の底に、油然と愛國の血潮が湧き起つてゐるのに氣がついた。

## 良心に追はれて

「俺達は賣國行爲をしてゐたのだ！」

二人の心の中にかういふ意識がはつきりと烙きつけられるやうになつた。だが、彼等は互にそれを口に出す事は恐ろしかつた。

「おい、僕はこんな事をしてゐるべき場合ぢやないと思ふがなア」

シユミツトが紫色の唇を震はせる。

「ぢやいまいどうするのだ？」

「あれが確かにホフマン老人だつたかどうか調べる必要があると思ふ」

「然し、自動車で走り去つてしまつた老人を見つけやうがないぢやないか」

「だからさ、急いでカールスルーエに歸つて行つて、あの別荘に老人がゐるかどうか調べてみる



んだ。若し老人がちやんとみれば、あれは人違ひといふ事になる』

「だが僕達は無事に歸られるだらうか？」

ハイエルマンの眼は恐怖におびえてゐる。

「どうして？ 歸られないわけはないぢやないか」

「ことによると、もう僕等のやつた事が發覺して、その筋の網が張られてゐるとは思はないか」

「僕はそんな事をいつてる場合ぢやないと思ふ。若しあの圖面がフランスの手に渡つてゐたとしたら、その結果がどうなると思ふんだ？」

「さうか。それぢやすぐに歸らう」

ハイエルマンは悄然として同意するより他はなかつた。

彼等はその場から北停車場に駆けつけて、ケルン行の急行列車に乗り込んだ。その列車の別の車室には、いつの間に尾けてゐたのか、公務を終つたケルン警察の刑事がちやんと乗り込んでゐた。

翌朝、列車がケルン驛に到着すると、刑事はホームにつめてゐた同僚の刑事に彼等の尾行を依頼し、直ちに驛構内の警察電話にとびついた。

「署長ですか？ 今歸つて来ました。歸りが遅れたのは重大な嫌疑者を尾行してゐたからです。その二人連れは私と同じ列車でパリに行つた青年ですが、どうも只者ではありません。モンマルトルの醜業婦を買収して聞きこんだところによると、どうもフランスの諜報部に連絡がある様子なのです」

「よろしい。君はすぐ尾行を続け給へ。迂闊に捕縛しちやいかんよ」

署長の指令を受けて電話室を出てみると、彼等二人は待合室でカールスルーエ方面に行く列車の出發を待合せてゐた。刑事は同僚に交代して、彼等の尾行を繼續するのである。

さて、署長は何故刑事に速刻捕縛を命じなかつたのか？ その時既にパリに潜入してゐたドイツ諜報網からの報告で、ベルリンの諜報本部に意外な飛報が舞ひ込んでゐたのである。それは何處から入つたものか『ジグフリード線』工事に關する一部の設計が、フランス諜報網の手に入つた様子がある、といふ報告だつた。愕然としたベルリンの諜報本部は、國境要塞線に沿つた各地の防諜網、警察網に向つて、大活動に入るやう非常命令が發せられてゐたのである。

署長の見解では、刑事がパリから尾行して來た二人の青年は、極く末梢的な分子に過ぎまい。うつかりそんな者に手出しをして、かんじんの本據を遁がしては何にもならぬと思つたからであ



らう。

シユミツトとハイエルマンとは既にそんな監視が附いてゐやうとは夢にも知らず、いつの間にか元の着古した洋服に着換へて、戦々兢兢々としてカールスルーエの停車場に降り立つた。懐かしい町はもう夜の帳に閉されてゐた。

「君、すぐにあそこへ行つてみやうぢやないか」

「うむ、さうしやう」

彼等は驛前のタクシーを雇つて、郊外のホフマン別荘へ行く事にした。そのタクシーの後を通りかゝりのトラックが追跡してゐた。刑事は同じタクシーで追跡して萬一彼等に氣附かれる事をおそれて、丁度通りかかつたトラックに飛び乗つたのである。

別荘の一丁ばかり手前で車を降りた二人は、注意深くあたりの様子に氣を配り乍ら、一歩くと別荘に近附いて行つた。いつもならば、二階のカード室に明々と燈火が輝いてゐる筈なのに、どうしたものか何の部屋にも光が見えない。魔物のやうなまつ黒な建物が、ボブラ並木に圍まれた廣い邸内にうづくまつてゐる。次第に足を早めた二人が、通ひ馴れた門の前に立つた時、彼等は呆然として洞ろな瞳を見交はさなければならなかつた。

「あッ賣家の札だ」

「もう誰もゐない。やつぱりさうだつた」

彼等を嘲笑するやうに、眞新しい賣家札が白く浮き出してゐる。

## 動く食器棚

「おい、どうしやう」

ハイエルマンが暗然として問ひかけた。

「僕等の行爲はもう明瞭だ。僕等は祖國を賣つたのだ。自決しやう」  
シユミツトが淋しく答へる。

「自決……？ そりや早計ぢやないか？」

「どうしてだ？ それより他にとる道はないぢやないか」

「僕等の犯した罪を何かで償ふ方法はないかしら？」

「君は死ぬのが恐いんだな？ ぢや勝手にし給へ」



シユミットが憤然として、たつた一人ハイエルマンを残してその場を立去らうとする。と、その瞬間、

『おい、待ち給へ』

闇の中から聲がしたかと思ふと、シユミットはグイと肩先を掴まれた。その氣配にあわて、逃げ出さうとしたハイエルマンは、背後からドスンと突き跳ばされて、前のめりに転倒した。その上にのしかゝつたのは、さつきから尾行してゐたケルン警察の刑事である。シユミットはもう觀念して、おとなしく刑事の縛に就いた。

『此の家とお前達とはどういふ關係があるのだ？』

刑事の質問に對して、シユミットがかいつまんで Hoffman 老人の話を打明けた。これを聞き終ると、

『よろしい。一緒に來給へ。此の家の家宅搜索を行つてみよう』

と低い門の扉を押し開いて、刑事は二人を前に押しやつて邸内に入つて行く。玄關の扉はピツチリと鍵がかけてあつた。刑事は傍の部屋の窓硝子を破つて、窓を押し開けると、二人を促して先に屋内に押し入れてから、自分も用心深く窓枠をのり越えた。

屋内はどの部屋にも全然人の氣配がなく、シーンと静まり返つてゐる、階下から二階と注意深く、懐中電燈の僅かな光で照し乍ら探り廻つて、最後に彼等は地面よりも少し低く半ば地下室のやうになつた臺所に歩を進めた。と、刑事が敏感に何かを嗅ぎつけたらしく鼻を動かして、

『おや……？ まだ紙か何かを燃やしたらしい匂ひが残つてゐる。今日引越したばかりらしいぞ』

とつぶやいた。そして料理用ストーヴの鐵板に手を當てゝみて、まだ多少温氣が残つてゐるのを感じると、素早くその鐵板をめくつて見た。様々の書類だの手紙屑だのを燃したらしく、燃え殻が黒くまだ原形のまゝに残つてゐる。

『これは此のまゝそつとして置かう。何か掴めるかもしれん』

と刑事がつぶやいた時、シユミットが突然、耳を澄まして刑事の背を叩いた。

『音がします。足音のやうですが……？』

刑事もギョツとして耳を澄ませた。ほんの微かではあるが、コツ／＼と靴音が何處かから響いて來る。それは空つぽになつた食器棚の裏の方らしい。その靴音が次第に大きく近寄つてゐるのだ。



「静かに！ 君達の罪滅ぼしをする機会を、神様がお授け下さるかもしれん。協力するんだぞ？」  
刑事が低い、然し力のこもつた聲で二人にいつた。二人は闇の中に無言のまゝうなづいて、ゴ  
クリと唾を呑み込んだ。

彼等三人が息を殺してゐるとも知らず、靴音は次第に近づいて、食器棚の裏でピタリと止つた。と思ふと、食器棚が音もなくスツと前方に開くのである。その隙間からサツと光芒が室内に走つた。幸にしてその光の矢はそこに潜んでゐる三人からは外れてゐる。

次の瞬間、携帯電燈を左手にぶら下げて、頑丈な體軀の大男がぬつと姿を現した。シュミツトとハイエルマンのおびえた瞳が、ヂツとその男に注がれる。あ、彼等が無理に手形に署名をさせられたザイラー辯護士だ。

「女といふ奴は一寸したところに注意が足りんで困る。手数のかゝる奴だ」

彼はさう口の中でつぶやき乍ら、電燈の光芒を料理用ストヴに向け、ツカ／＼とその前に歩み寄らうとした。突嗟に鋭い物音が起つたかと思ふと、彼の背後に刑事が跳びかゝつてゐた。それと見ると、シュミツトもハイエルマンも我を忘れて跳びかゝつた。

携帯電燈は床に叩き落されると同時に光を失つて、室内はまっ暗である。闇の中の格闘が二

三分間續いた。

「畜生ツ！ しまつた！」

三人に組敷かれた下から、ザイラーの唸めくやうな聲が漏れた。刑事の捕錠がもう彼の腕にかゝつたのだ。

刑事はザイラーを料理臺の脚に後手に縛りつけ、嚴重に猿轡をかませると、

「君は此奴の見張りをしてゐ給へ」

とハイエルマンに命じてから、

「さ、ぐづ／＼してゐる場合ではない。君は一緒に來るのだ」

とシュミツトに指圖をして、食器棚の裏にもぐつて行つた。そこにはやうやく一人一人が立つて歩ける程の坑道が口を開けてゐる。その道は地下に長々と續いて、聽て重たい扉が行く手をさへぎつた。刑事は扉に耳を押し當て、扉の外の氣配を聞きとらうとしたが、人がゐるのかゝらないのか何の音も聞えない。懐中電燈で捜してみたが、何處に手をかけて開ける手がゝりも發見されなかつた。

刑事は遂に意を決したらしく、ドン／＼と強く扉をノックしてみた。と、扉の奥から女の聲が



微かに聞えた。

『只今』

それはドイツ語ではなく、明瞭なフランス語である。續いて僅かな軋りを立て乍ら、重い扉が外に向つて開かれた。刑事とシュミットとは、その隙間から跳り出たのである。

そこには一人の女が、あまりに突然の出来事に啞然として、おどくどくと立ちすくんでゐた。女はホフマン老人の家で見た家政婦だつた。

刑事は彼女を縛り上げてから、その家の中を縦横に捜し廻つてみたが、もうその他には全く人影がなかつた。

結

末

その夜、カールスルーエの警察署員に護送されて、ザイラーとホフマン家の家政婦と、シュミットもハイエルマンも一緒に警察へ連行され、嚴重な取調べを受けたのである。シュミットとハイエルマンとは、それまでの出来事を残らず告白してしまつた事勿論だが、ザイラーは固く口を

緘して一言も答へやうとはしなかつた。

『私は何も存じません。たゞ御老人につられてフランスから来たといふだけで、皆さんがどういふ事をしてゐらつしやるのかも私は知らないのです。御老人ですか？ はい、あの方が御別荘をお引上げになつたのは一昨日でございます。デーメルさんと女中のアンナとがお伴をして参りました。私は後始末をする爲に後に残つたのです。あのザイラーといふ方はよく存じませんが、御老人の顧問辯護士だといふ事です。その他の詳しい事は何も存じません』

家政婦は齒をガタ／＼鳴らし乍ら、やうやくそんな事を語るに過ぎなかつた。彼等はひとまとめに憲兵隊へ護送されたのだが、そこでどういふ陳述がなされたのか、外部の者は知るに由もない。が、『ジグフリード要塞線』の工事の一部分が突如中止となり、新たに設計替へとなつて續けられた事は事實だ。

中でも當局をして狼狽せしめたのは、水道敷設工事の明細圖と、水源地の設計圖が寫しとられたといふ事だつたらしい。何故かといふと、何箇軍團かの兵隊がその中で土鼠のやうな生活を續け乍ら、敵軍に對抗する爲には、弾丸も無論必要ではあるが、彼等に供給する飲料水はそれ以上の必要品である。人間は水を奪はれたら、一日も生きてゐる事ができないのだから。で、水源地



を敵に知られて爆撃でも集注されたなら、要塞内にこもつてゐる兵隊は渴死しなければならぬ。いや、それよりも恐ろしい事は、スパイ戦による細菌散布である。全く肉眼で知る事のできないベスト菌だとか、コレラ菌だとかいふ細菌類を、水道の一部からこつそり投入された場合を想像するがよい。たゞ想像しただけでも身の毛のよだつ思ひがあるではないか。細菌戦はハーグ條約によつて嚴禁されてはゐる。だが、平和時に締結された國際間の條約などは、一度砲聲が鳴り出したなら、たちまち反古同様になつてしまふ事は既往の事實が最も雄辯に物語つてゐるのだ。

ザイラーがどうなつたのか、家政婦がどうなつたのか、その消息は全く聞く事ができない。ホフマン老人とデメールとアンナとは、まんまと逃げ延びてしまつたらしいが、彼等の名のつてゐた姓名は勿論假名だらうから、本人がどういふ人物であるかも不明のまゝだ。然し、彼等の努力によつて盗みとつた設計圖は、惜しい事に間もなく効果のないものになつてしまつたのだ。若し此の事件が発覺せしむたならば、フランス軍の主力はカールスルーエを中心として攻撃を開始し、大いに効果を挙げたかもしれないのだが、今日の「ジグフリード線」のカールスルーエ附近の構造は、その時限り全く廢改されて新らしいものに變つてゐる。

配給元  
 東京市神田區淡路町二丁目九番地  
 日本出版配給株式會社

翻弄された防諜官

著作者 益 田 甫

發行者 福 永 晴 彦

東京市芝區新橋五ノ一八

印刷所 大 西 印 刷 所

東京市芝區田村町六ノ二三

東京市芝區新橋五ノ一八

發行所 合資 大 元 社

電話 三三二八三六番  
 振替東京一三四七五〇番

定價一圓六十錢



昭和十六年六月二十五日印刷  
 昭和十六年七月八日發行







416

83



終

